

# 会報

第 58 号 (2021/2/17)

〒720-0082

広島県福山市木之庄町 4-3-14

Tel&Fax:084-917-5937

Mail:

h5s21bm6@ene.megaegg.ne.jp



Community Renaissance  
Research Center

## 2021年、年頭にあたって

代表理事 安川 悦子

あけましておめでとつ「ございます」。

「コロナも無事おさまって本当におめでたい」と言いたところだが、コロナはますます勢いをまし、ふたたび緊急事態宣言が出されようとしている。うまい酒や肴を飲んだり食べたりしながら、生きる喜びや悩みを仲間や友人と自由に語り合うという、ヒトとしての究極の行動がいままた制限されてしまっているのである。

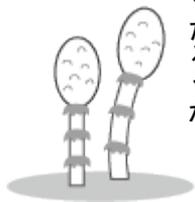
ヒトとヒトとの自由な往来は、いまや一国どころか、地方毎の狭い範囲に限られ、それどころかもっと小さな範囲での往来もとざされようとしている。あたかも中世封建社会の時代のようにである。中世の時代と大きくちがっているのは、いまでは、「情報」と「カネ(電子化された)」は電波によって世界中を瞬時にかけめぐれるが、ヒトは狭い地域や家庭の中に「蟄居」させられている。コロナが私たちにつきつけている得体のしれない「刃(やいば)」「である」。

「この刃をどうとらえたらよいのか。今から130年ほど前、19世紀から20世紀にまさに移ろうと世紀に、イギリスの社会運動家で思想家であったウィリアム・モリスが『ユートピアだより』(News from Nowhere)という小説を書いた。

モリスが描き出したユートピア社会では、日常生活に必要な物資は、この社会の外側にある高度に機械化された生産力によって自動的にまかなわれ、ヒトは、このコミュニケーションの中で人間らしい生きがい(労働(モリスにとっては手作りの工芸をする))に励んで生きるというのである。ヒトはこの「喜びとしての労働」を自由に行使する権利があるというのがモリスの主張であった。

モノや金の世界的な自由往来をそのままにしておいて、ヒトだけがローカルな小さなコミュニティの中に困り込まれ、その中で人間らしい生きがい労働を実現する。つまり「労働の喜び」を実感しながら生きることでできるコミュニケーションを創り出す。これがモリスの空想的な提案であった。

21世紀も20年を経た今、このモリスの提案した課題の実現が迫られているように思えてならない。コロナの風がふきまくる2021年の年頭にあたって、コミュニティにおいて「喜びとしての労働」をどう実現していくのか、これを「コミュニティルネッサンス研究所」の活動のテーマにしたらどうだろうか。



## ホームページ、メールアドレスが かわりました

このたびは諸々の事情により、メールアドレス及びホームページを変更しました。これまでの「of@...」で始まるメールアドレスと、旧ホームページのアドレスは使用できません。ご注意ください。

ホームページの移行手配は、本会会員の平田さんが行ってください大変お世話になりました。どうもありがとうございました。

新しいホームページは次のアドレスです

<http://www.fan.hi-ho.ne.jp/ryu5/crrc-fukuyama/>

新しいメールアドレス

[h5s21bm6@ene.megaegg.ne.jp](mailto:h5s21bm6@ene.megaegg.ne.jp)

今後の予定

シロントロジー研究会

2月18日(木) 14時〜

- ・場 所：ルネッサンス研究所
- ・参加費：300円
- ・内 容：第2章3

『かかりつけ医中心の在宅医療』  
21ページから。

「ケアの社会学」を読む会

2月18日(木) 16時半〜

- ・場 所：ルネッサンス研究所
- ・参加費：300円
- ・読む本：上野千鶴子著『ケアの社会学』
- ・内 容：「第6章3：ケアは労働か」  
(P. 137から)

今号の内容

- ・ 第二の仕事で働く人  
その生き方を聞き取り
  - ・ 100歳の先輩から学ぶ生き方  
〜中国新聞の記事より〜
  - ・ コミュニティルネッサンス研究所が  
行っている感染症対策  
続アヒルのポコちゃんペコちゃん物語  
最終回
  - ・ 編集後記
- ※内容は以下に記載

活動報告

第二の仕事で働く人  
その生き方を聞き取り

11月5日、名古屋の希望学研究会に所属されている塩見、羽田両氏の「ポジティブエイジングに関する調査」に同席しました。退職した後も働いている方にヒアリングを行いました。お話を聞いたのは介護施設で働く70代の男性1名、女性1名でした。

男性の現在の業務は介護全般で、送迎もしているとのことでした。女性は、介護施設内の調理補助、清掃などに携わっています。お二人に共通することは、若い時から従事してきた業務とは全く違う分野である介護の分野に再就職されていることです。

なぜお二人は再就職したのでしょうか。お二人のお話を総合すると、「リタイアした後、毎日遊んだりいいと思っていたが、毎日遊ぶには、お金もいるし、時間をもて余す。遊んでいて体調を崩すくらいなら仕事をした方がいいと思った」とのことでした。また、「収入面でも評価されていると感じられる。また、利用者との交流でうける「ありがとう」の言葉が嬉しい。社会に役立つという実感が生きがい、喜びになっている。もっと勉強して介護の資格をとりたい」とのことでした。

お二人のお話は、安川代表がいわゆる「喜びとしての労働」に通じます。お二人のお話からは、いくつ

になっても成長したいという思いを感じ取ることができました。話を聞きながら、多趣味であった知人を思い出しました。その知人はすでにリタイアし、趣味を満喫されていると思っていました。生活のリズムが崩れて体を壊されたのだと聞きました。人が充実して生きるためには、「喜びとしての労働」が生活の質を上げるのだと感じました。

なお、平成30年度の介護労働実態調査(財)介護労働安定センター)の結果によると、65歳以上の介護労働者の割合は、12.2%で全体の1割を超え、60歳以上では、21.6%と全体の2割を超えています。

(介護労働者とは、介護職員のほか、看護職員、作業療法士、理学療法士、管理栄養士なども含まれます)  
(澤田)



聞き取り調査に  
事務局も同席しました

## 100歳の先輩から学ぶ生き方 〜中国新聞の記事より〜

安川代表の年頭の挨拶は『「喜びとしての労働」をどう実現するか』、がこれからの当 NPO 法人が取り組む課題である、と言う趣旨でした。

中国新聞の記事に、まさに「代表の文章」の意図に合致すると思える方が紹介されています。その人は、尾道市郊外の急な坂の上に一人で暮らしている石井哲代さん、なんと100歳！記事の大きなタイトルは『哲代おばあちゃん 100歳今日も好日』。2020年11月30日号の記事のテーマは『嘆くより忙しゆう動きます』、2021年1月25日号は『私を支える7つの習慣』。

これらの記事を読んで、私の生活にも取り入れたいと思った事を五点あげて紹介したいと思えます。

### 1 『坂の上り下りもトレーニング』

ややもすると、私たちはしんどいことをマイナスと考えがちです。しかし石井さんは坂があるからトレーニングが出来ると考えています。一般にまわりは「危ないからそんなことをしないで」と禁止しがちです。しかし石井さんは「鎌を杖代わりにして後ろ向きに降りる」、膝が痛いときには「歩行に集中する為に歩数を数える」とちゃんと危険防止も考えた上での行動です。

### 2 『よし、大丈夫』状態チェック』

昨年入院生活を体験したら足がふらつくようになり、介護用ベッドを借りたとか。普通なら布団はそのままになるところを、毎日たたくで押し入れに入れていけるところが石井さんらしいところ。しかも〇〇をしなければならぬ」と考えるのではなく、今日も布団が上げられた、味噌汁が作られた、畑に出られた、と自分の状態チェックと考え、仕事を楽しみながら行動されているところは特に学ばなければと思いました。

### 3 『こだわるのは『自律』した一人暮らし』

まわりの人の手助けも受け入れながら、『してもらうことばかりに慣れたら心が寝たきりになる』と、自分の行動については自分で考えて決め、行動に移されている。ここが素晴らしいところだと思います。

### 4 『悩み事は日記にちよびつと』

この様な前向きに生きている石井さんでも、亡夫とのあいだに子どもがいらないことを考えて心細くなることもあるそうです。でも、『悩み事はちよびつと日記に書く』と気分がスーッとすると。悲劇の主人公にならないよう落ち込んだときの発散方法も工夫もされています。

### 5 『年を取るといいこともある〜』100歳になっても成長しようとして〜』

見守りなど、まわりの人の何気ない心づかい、自然の移り変わりなどがささやかな喜びとして胸に響くという。私も年を重たすことで、雑草の草モミミ

をきれいだなあと感動できるようになりました。それを自分の成長と捉えることが出来るのが石井さんの素晴らしさだと感じました

このように、石井さんがこの年まで前向きに自立した生活が出来ているのは、2つの条件があるように思います。一つは家のまわりに、畑など居場所(体を動かすところ)があること、二つ目はイモ作り等仕事を通して作物から喜びを受け取っていること、があげられると思います。私自身もこれからの居場所作りと生きがいとする仕事作りを考える必要があるな、と思いました。

先日市主催の『フレイル(虚弱)予防講座』に出かけ、フレイルを予防するメリットは何か、を考えてみました。医療・介護の経費節減につながる事もメリットでしょう。一方私たち市民にとつてのメリットは何か。おそらくこの記事の石井さんのように、生きがいを感じながらその人らしい人生を出来るだけ長く送ることが出来る、と言うことではないかと思いました。

(なお、カギ括弧入りの強調文字の所は、中国新聞から引用した部分です)

(文責 加納)



## 「コミュニティルネッサンスが おこなっている感染症対策

コミュニティルネッサンス研究所では、コロナ蔓延以降、広島NPO法人のガイドライン等を参考にしながら予防対策を講じてきました。なかでも耐震診断評価委員会は、NPOが定例的に行っていました。7月以降今まで6回の委員会を保持しています。

その他「ジェロントロジー」や「ケアの社会学」などの講座や「オカリナが吹けるよ!」も、感染状況をみてお休みにしたり回数を減らしたりの判断をしながら細々と続けています。

実施条件は、①連絡先の分かる人の集まり②検温、消毒や換気に配慮、またオゾン発生器や加湿器を使用したりと配慮をしながら行っています。

当面これまでのように多くの人に声かけをしてのイベントは開催することができにくい状況です。これからもこの会で出来ることを考えながら事業を続けていけたらと考えています。今後とも「理解とご協力をお願いします」。

またこの度、正会員の皆様・賛助会員の皆様には会費納入のお願いも同封しておりますので宜しくお願致します。

## 連載

### 「あひるのポコちゃん

### へ「ポコちゃん物語」最終回

辻村 真子

#### 7羽のひよこが生まれた!

「この日の出来事は、学校から帰ってから知りました。だからお母さんの見たことをそのまま書きます。

怜と私がまずポコを見送られて出かけました。そのあとお父さんが家を出ようとしたとき、お母さんは、いつものようにベコちゃんを見に行きました。何かいつもと様子が違って、ベコちゃんが落ち着かず卵から体を起こし始めたそうです。そこには7つの卵があったのですが、一つが今にも割れそうだったので、急いでお父さんと呼んで一緒に眺めていたら、ヒビが入って卵からひよこが顔を出しました。瞬たのです。一日かけて次々ひよこが出てきて、7羽とも無事に生まれました。はじめの一羽でもお父さんは学校に遅刻しそうな時間になってしまったので、あとはお母さん一人でごうごうと、困ったそうです。何を食べさせたらいいのか分からず、まさかベコちゃんが普通の鳥の子育てみたいにエサを与えようとは思えなかったのです。まず水の入った器と、インコ用のあわを水に浸しておいてやりました。

そのうちにひよこたちはそれらをつきだしたみたいですよ。お母さんはその姿に感動したと言いました。何も教えなくてもそれがエサというもので、食べることを知っている。

隙間から道路に出て行つては困るので、入り口を板で

ふさいだり、写真を撮ったり、お母さんは大わらわでした。7羽のひよこは、ベコちゃんのあとをよちよちついて庭の中を見物し始めました。ときどき土をついたり、草をかじったりしました。

お母さんは、一羽をプールに入れてみたら、上手に泳ぎました。だから、ほかの子も捕まえて水あびさせました。



お母さんベコのあとをついて歩く7羽のひよこ

それからは、近所のお友だちがつきつき見に来て、みんな「かわいい!」と評判になりました。

その間ポコちゃんがどんなふうに通っていたか、覚えていません。私たちもきつとひよこに夢中だったので。ある時、大脱走事件も起きました。7羽がそろって、道路の側溝に落ちて逃げ出そうとしました。それ以上行く深く、コンクリートのフタがしてあるので、近所の友だち5人ぐらいが必至で協力して、なんとか捕まえてもどすことができました。よかったです!

#### ひよこはどうなったのか

ひよこのうちは、オスなのかメスなのかわかりません。お友だちが「これ！」と、選んだ人から早い者勝ちでした。ぼつぼつ欲しい人たちが取りに来ました。

まず O 君のところへ一番にもらわれていきました。そこにはやはり犬がいたけれど、仲良くしてもらったようで、犬のお腹の下にもぐっていつも一緒に散歩に行ったそうです。どうやらそこはメスになったそうです。

N 君は、マンションの一階に住んでいたの、庭で飼えました。確かパチャという名前でした。N くんとおねえちゃんは、パチャがかわいくて、時々部屋の中に連れてきて遊ばせたいみたいです。ある時、お母さんが裁縫していたそばまで来て、うっかりしている間にまち針を飲み込んでしまったそうです。

あわてて獣医さんに連れていき、手術してもらいました。まち針を取ってもらったパチャは、とても元気なオスになりました。N くんは事件が起きたとき、大泣きをしてお年玉のお金を使って治して！と、お母さんにお願いしたと、あとから聞きました。

K くんは一人っ子で、その時は犬も猫も飼ってなくて、もらってきたひよこをそれは大切にかわいがりました。外ではさみしいから、家の中で飼っていたそうです。K 君のうちに行つて何日もたつてないある日、ベッドと一緒に寝たら、朝になって K 君の下敷きになってそのひよこは死んでしまったそうです。お母さんのお友だちのうちのお出来事だったので、その話をだいぶ経ってから聞かされて、私まで悲しくなりました。まだメスカオスカもわからないほど小さい時でした。K くんがどんなに泣いたか、想像できました。

そのほか、幼稚園に二、三羽もらわれていきました。私の希望で一羽だけは残してもらいました。少し小さくさい子だったので、私は「どん」と名付けました。どんは、いつもペコちゃんの後をくっついて歩いていました。だんだん大きくなって、メスということがわかりました。そのうちどっちがどつちかわからないほどの大きさになりました。二羽の違いは、ペコちゃんの頭ははげていたので、なんとなく区別はつきました。

何か月か過ぎたころ、困ったことが起きました。ポコがペコと間違えて、どんを追いかけるようになったのです。これ以上ややこしくなるとは困るので、大きくなってしまつたけれど、前にひよこをもらつた幼稚園に聞いたら、いただきますということだったので、結局そこにあげました。さみしくなりました。

元通りの二羽だけのアヒルの夫婦に戻って、それから後は、ペコちゃんは卵を生んで温めることはあつても、二度とひよこに孵すことはできませんでした。



**ポコちゃん7歳、先に死んでしまった。**

**残ったペコちゃん**

二羽は仲良く過ごしていました。途中でポコがノラ猫におそわれて、羽のつけねをけがしてしまつたこともありました。お母さんは、ヨモギの葉をたくさん摘んできて、すりこ木でつぶして汁をだして、それを何回もぬつてやりました。そのうちケロッと治つてしまいました。でも、ポコは少しずつ元気がなくなり、近所のはつちゃんも7歳で「

なくなったし、うちで飼っているインコもそれぐらいで死んでしまったので、そろそろペコたちも、そういう頃かもしれないと心配してました。

はつちゃんのおばさんは死んでしまった後、写真を毎日なでて写真が黒くなってしまつたと聞きました。お母さんは、写真よりもはく製にした方が生き生きと姿が残る！そういつて電話帳で鉄砲屋さんを調べました。電話で聞くとはく製を作ってくれることがわかりました。

そしてついにその日が来てしまいました。ポコは庭でゴトリと倒れたまま起き上がることはありません。9月の日曜日の午後でした。うちのお仏壇の前にポコちゃんの入った段ボールを置いて、皆でお参りして、すぐお母さんははく製屋さんに車を走らせました。

さて、それからが大変でした。私は高校生になっていました。だからほとんど世話もしなかつたと思います。朝早くからペコが鳴くのです。朝だけでなく、昼間もよく鳴いていたそうです。ただでさえ、ガーガーとうるさい時もある、近所迷惑になっていたのに、さらに大きな声で鳴くようになってしまいました。お母さんはお父さんに、「もしもあなたに何かがあつても、あんな声では泣かないから」と憎まれ口をたたいていました。それほどペコの鳴き方は淋しくて淋しくて、、、という感じの声でした。

そこでこれ以上一羽だけでは飼えないと、皆で相談して、家から見に行ける距離で、同じ種類のアヒルのいる池を探しました。ちょうどK市の東の端にある市営の緑化公園の池がピッタリということで、ある日伶とお母さんはペコを捨てに、というと悲しくなるので、ペコにとってもっと環境の良いところに引っ越してもらいました。

私はついていけなかつたけれど、二人はきつと泣く泣くさよならをしたと思います。

ポコちゃんはく製になって帰ってきた

もうあひるたちのいないわが家になってしまいました。飼っていた動物をなくす悲しみは、インコのときに味わっていましたが、ポコは比較になりません。話を通じたというか、彼らが望んでいることが理解できたし、家族みんなでそれに応えようと一生懸命付き合ってきました。何よりすばらしいことは、ひよこの誕生も見届けられたのです。どれだけ楽しませてもらったことでしょうか。

近所の子どもたちも同じだったと思います。とりわけ怜の寂しさは半端ではなかったと思います。

その後、お母さんと怜は、二、三度緑化公園に見に行きました。ペコはみんなに交じって大きな池で泳いだり、池の端にあがったりしていました。相変わらず、頭の上がはげたままなので、こちらはペコのがよくわかりました。本当は、二人を見つけて走り寄ってほしかったのですが、そういうことはありませんでした。

そして、半年ほど経ったころ、鉄砲屋さんからポコのはく製ができたご連絡がありました。新しいポコとの出会いでした。

ポコはそれ以来ずっと家の玄関で、いつもいつも同じ姿勢で来る人を迎えています。

私や怜が大学生になって帰省したときも、結婚後、子どもたちを連れて里帰りした時も同じ顔で出迎えてくれます。

ポコの死んだのは夏だったので、あのきれいな青首の羽が、夏の白っぽい羽のままだったことを、お母さんはいつまでも残念がっています。それから、

ポコの死後何か月も経ってない頃、今度はシルバゲレイの品の良い猫が迷い込んできました。結局辻村グレイと名を付けられ、飼いなこに。

今度はグレイ物語が書けるかなあ。

(おわり)



剥製になったポコちゃん



編集後記



皆さまお元気でお過ごしでしょうか。記事にも書きましたが事務局では最近、お昼は広い会議室で食べたり、勤務は午前で切り上げテレワークを取り入れたり、工夫して密を避けながら仕事を行っています。

また私個人では、コロナ禍のお陰で、<sup>zoom</sup>や無料アプリビデオ通話、飲食店宅配サービス、インスタ、電子書籍、携帯でのコード決済など新たな便利ツールを使いこなせるようになりました。世の中ますます便利になり、何だか悪い事ばかりでも無いなあ、と感じる日々です。パンデミック前までは、デジタルよりもアナログに好意を持っていた私だったのに。

NPOでは仕事の進め方など色々な方から大切な事を学ぶ機会が多いです。変化を恐れず時代に合わせて自分自身も進化させ、自己研鑽していけたらな、と思う今日この頃です。

NPOへのお便り募集!



(兼)

「ミルネへのお便り」を募集します。「ご感想・ご意見」などをTEL・FAX又はメールアドレスにお寄せ下さい。

問い合わせ・申込先

NPO法人コミュニティルネッサンス研究所

電話・FAX: 084-917-5937

メール h5s21bm6@ene.megaegg.ne.jp